

いつれの御時おほんときにか、女御にようご、更衣かういあまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際きはにはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

はじめより「我は。」と思ひ上がりたまへる御方々、めざましきものにおとしめ嫉そねみたまふ。同じほど、それより下臈げらふの更衣たちは、ましてやすからず。朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積もりにやありけむ、いと篤あつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして、人のそしりをもえ憚はばからせたまはず、世の例ためしにもなりぬべき御もてなしなり。

上達部かんだちめ、上人うへびとなども、あいなく目を側そばめつつ、「いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土もろこしにも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れ、悪しかりけれ」と、やうやう天あめの下にもあぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃やうきひの例ためしも引き出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心みばへのたくひなきを頼みにてまじらひたまふ。

【中略】

父の大納言は亡くなりて、母北の方なむいにしへの人のよしあるにて、親うち具ぐし、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたう劣らず、なにごとの儀式をももてなしたまひけれど、とりたててはかばかり後見うしろみしなければ、事ある時は、なほ扱より所なく心細げなり。

【中略】

さきの世にも御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子おのこみこさへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧するに、珍めづらかなる稚児ちごの御容貌かたちなり。

一の皇子みこは、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲まごけの君と、世にもてかしづききこゆれど、この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私わたくし物ものに思ほしかしづきたまふこと限りなし。